

研究所だより

岩城 由紀子

去る12月3日、協同総研25周年記念集会を開催いたしました。当日は会員・会員外を問わず、実践者、研究者、協同組合関係者、他の研究所の方、協同労働に興味のある方、合わせて92名の参加がありました。また、電報やメッセージを送って頂いた方にもこの場を借りてお礼を申し上げます。

この集会の大きな目的は、協同総研が四半世紀の間、何を研究し、現時点の到達点と、今後の研究テーマを明らかにすることでした。

中川雄一郎副理事長は開会のあいさつにて、元協同総研理事長であった故菅野正純さんが「非営利・協同」を日本の協同組合研究で初めて主張したというエピソードを挙げ、今後も協同組合全体の理論をひっぱり役割を担う研究所であって欲しいと述べられました。

次に、岡安喜三郎理事長は協同総研の成り立ちや研究の歴史を、日本や国際社会の歴史と照らし合わせ説明しました。そして市場経済中心の資本主義が終焉を迎えようとしている今、社会的経済及び連帯経済が主軸となること、その担い手は国家ではなく地域の共同体であり、労働を軸とした地域自給圏の自立を真剣に考えるところに協同総研の大きな役割があるだろうと述べられました。

記念鼎談については2017年3月号に掲載予定ですが、丹羽健司さんは加藤彰彦さんのファンであることから、別の予定があったにもかかわらずこの集会に参加して下さい

ました。加藤さんは野本三吉というペンネームで、共同体に身をおいた経験を記した本を出版されていますが、丹羽さんはその本に書かれている調査研究場所を訪ね歩いた経験があるそうです。そうしたお二人の経験や実践を踏まえた鼎談となりました。

閉会のあいさつで岡村信秀副理事長は、一人の子どもとその母親の声から40年前は非常識だった無添加ウイナーを広める運動が始まり、今や常識となったことを例に挙げ、協同組合の原点は組合員や地域のニーズと共感であること、すでに生まれている地域の運動や実践(小さな協同)と大きな協同をリンクさせることが複雑化した地域の問題への対応を可能にすると述べられました。

集会では時間が足りず会場の皆さまからの質問やコメントを頂戴することができませんでしたが、終了後の懇親会では話し声が絶えませんでした。当日参加できなかった長野県在住の玉木信博理事は、鹿肉と畑で採れた大根を送ってくれました。センター事業団本部で食堂を担当している八巻さんが大根はおでんに、鹿肉は焼き肉用にたれに漬けてくれたので、熱々の料理もおいしいと好評でした。

25周年記念集会は盛会のうちに幕を閉じましたが、ここからが新たなスタートです。これからの協同総研の研究活動にご期待と、ご協力をお願いいたします。



集会后に撮った集合写真